

和田聡文 個展

「 既に水に落ちた私は、水の底より、
落ちていく彼らを見ていた。
私は、笑っているのか、泣いているのか。 」



Chabudai-Factory



1. 序文

2013.05.26 和田聡文

私の潜む日本の製造業とそれを取り巻く状況は、実に色々です。

ボロボロの老朽工場の奥で行われる
官民タッグの国外技術流出やら、
そこで自分たちをリストラした企業への復讐を企てる
老人たちやら、
知的障害者施設で行われる大手企業向けモジュールの
超低賃金組み立てやら、
商社の地方支社に囲われる
天才老ロボット工学者やら、
口先とフリーハンド手書きの図面のみで
仕様未定のまま設計製作をスタートさせる
テンパった中小の社長たちやら、
大人のおもちゃを設計する
20代女性ロボット技術者やら、
そこに本国から電子デバイスを売り込む
米大手メーカーの営業員やら、
無償でプロジェクトに参加すると
ドイツからメールをよこした
30才代のベンチャー野郎やら、
古い時計装置を我らの発明だという嘘をつけと強要する
皮膚病に冒された画像処理技術の准教授と
拳闘に耽る塵芥処理業者。

私は製造業の片隅で機械設計を営むもので、
あんなこんなで20年来の職場を失いました。
今、私の居る、製造業の水底から眺める日本のありさまは、
実にきな臭く、生臭く、奇妙で、一所懸命です。

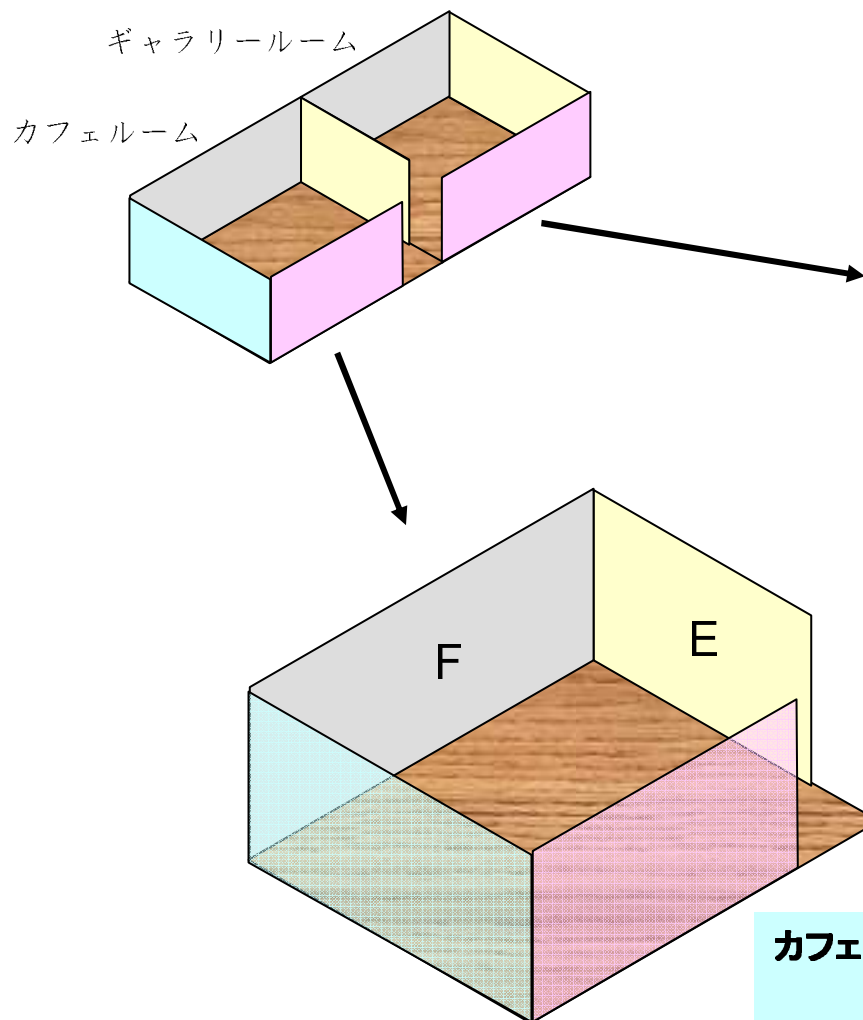


Chabudai-Factory



2. 部屋ごとの構成

2013.05.26 和田聡文



ギャラリールーム :

序文テーマに沿った内容を展示。
全壁面を使用。

カフェルーム :

テーマ外の内容、補足的な内容、気分の断片。
E, F壁面のみ使用。



Chabudai-Factory



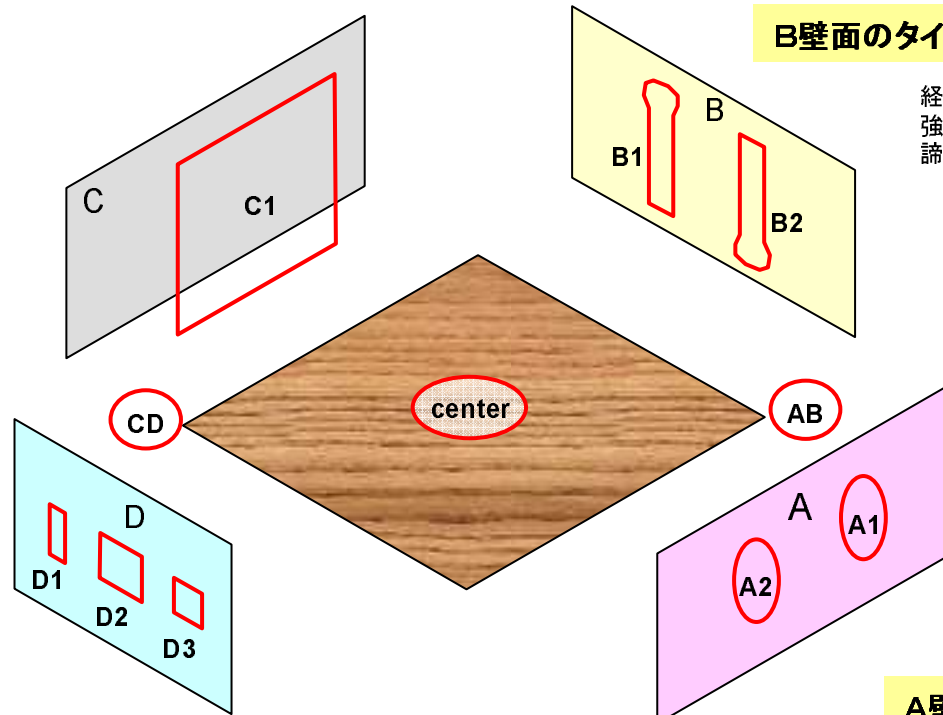
3. ギャラリールームの展示

2013.05.26 和田聡文

D面を除く隔壁の作品は、「上下に向かう矢印(ベクトル)」が対を為す。
各作品には、タイトルと補足的文書、画像を記載した冊子が付属。

C壁面のタイトル: 「今昔」

壊れた船縁より既に水に落ちて
泥の上にある今の私と
(私は手を失い、口だけで醜い。)
元の船に降臨し、支配したのに、
自身も水に落ちてゆく手の無い鳥たち。



B壁面のタイトル: 「浮いたり沈んだり」

経済の動力源たるヒトビトの2つの有様。
強い上昇志向を疲れきるまで利用される泡どもと
諦めて蹂躪を感受し、甘い夢のみを消費する軟体ども。

D壁面のタイトル: 「もしも愛があるならば」

これからにおいて、希望を持ちうる生業の有り方や生き方。
僅かばかりの美しい希望。
でも、私自身には脆く、儂く、相容れない有様。
古い世代がそんな生き方だったという思い出。

A壁面のタイトル: 「みんな死んじゃえ。」

私の目から見える世の中の有様について。
失われた金塊とそれを取り巻く教団。
ご破算願望。
「もういや。こんなの。終わっちゃえ。」



Chabudai-Factory



4. カフェルームの展示

2013.05.26 和田聡文

F壁面のタイトル: 無し

F1: 99枚の組写真。
作品としてではなく、散歩写真として
撮られたが、
何か嫌なものが写りこんでいるもの。
ギャラリー展示の気分的断片。

タイトル

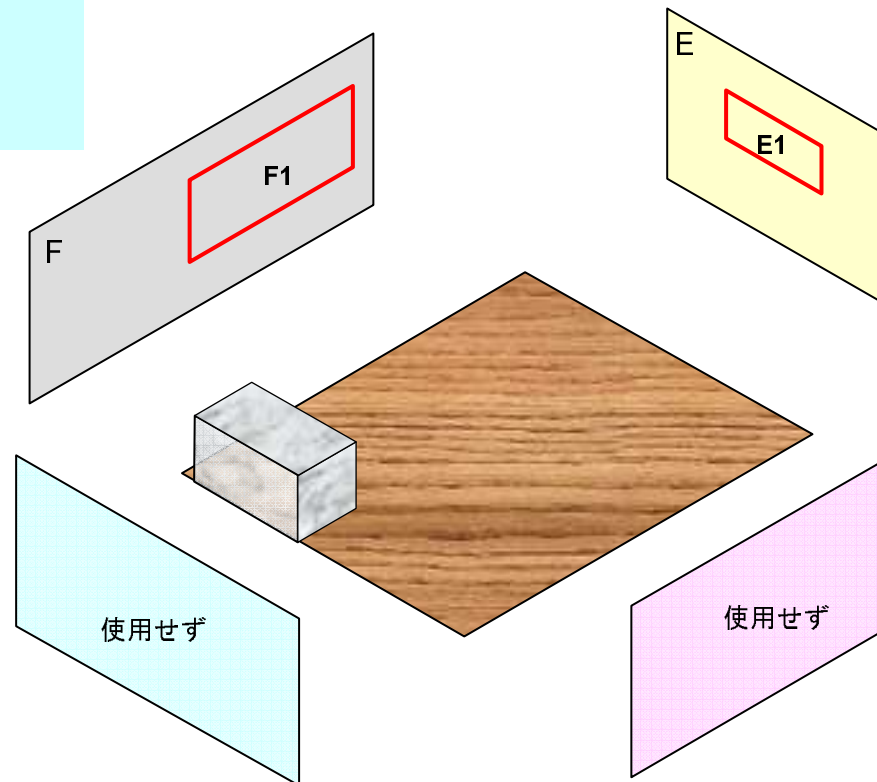
「写真の写真 幾ばくの嘘」

E壁面のタイトル: 無し

E1: 線画、筆ペン画、落書きの類

タイトル

「日々の歩行、日々の線
重力と反力、地平と足
ゼロモーメントポイントと安定余裕
手と目、紙と筆、軌跡と視覚」



art space tetra であった下記展示にての
会話への返歌。
「毎日何だか線を描いているんです。」

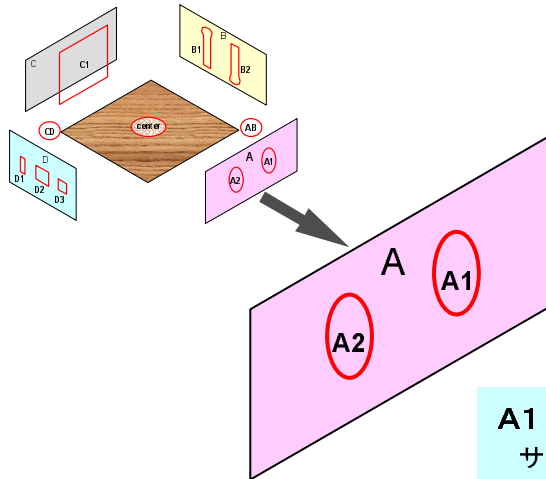
「黄色い壁紙」
2012年2月22日(水)~3月4日(日)
小山冴子、工藤見奈子、田熊沙織 3氏



5. ギャラリールーム 各壁面展示の詳細

2013.05.26 和田聡文

5-1. A壁面のタイトル: 「みんな死んじゃえ。」



A1:

サイズ: 縦700×横300×厚さ270mm

「栄光に至る王の道はただ一つであり、
道をたどれるのは彼ただ一人である。

彼のように生きなければ、何事も成し遂げられないが、
彼は何人にも真似し得ない、唯一無二の存在である。

彼は有ると無しとで記述される全てのものを産み落とした。
全ての鼠の父であり、全ての橋を渡し、全ての井戸を掘り、
河原の柳の葉より魚を放った。

彼が全てを形作り、他の誰も何一つ作らなかった。
彼は全てを成し遂げた。あなたは何も果たさなかった。
彼のみが価値ある存在である。あなたに何の価値もない。」



A2:

サイズ: 縦700×横300×厚さ200mm

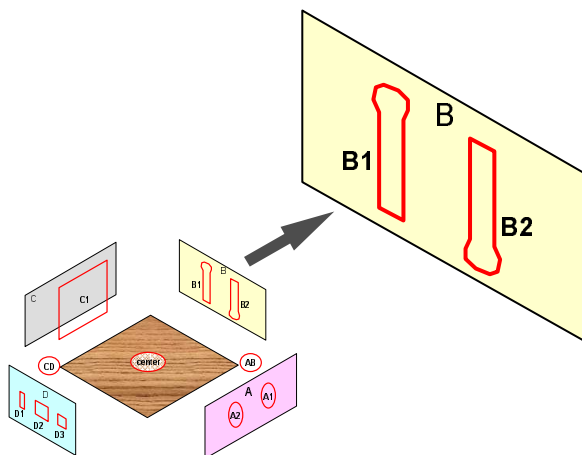
「中央の金色は失われたが、
我らは再びここに集う
我らの血と彼らの肉を塗り込めて、
我らの気をもて社を築く

金色を称える我らの信心は、
喪失以前より遙かに倍加し、
我ら血と肉と気の神殿は、
彼らを梃子に膨れあがる

金色の実体は喪失したが、
その気は遙か巨大に膨れ、
信徒の口のみ甘露を与え、
我らと彼ら、全ての者どもに君臨する」



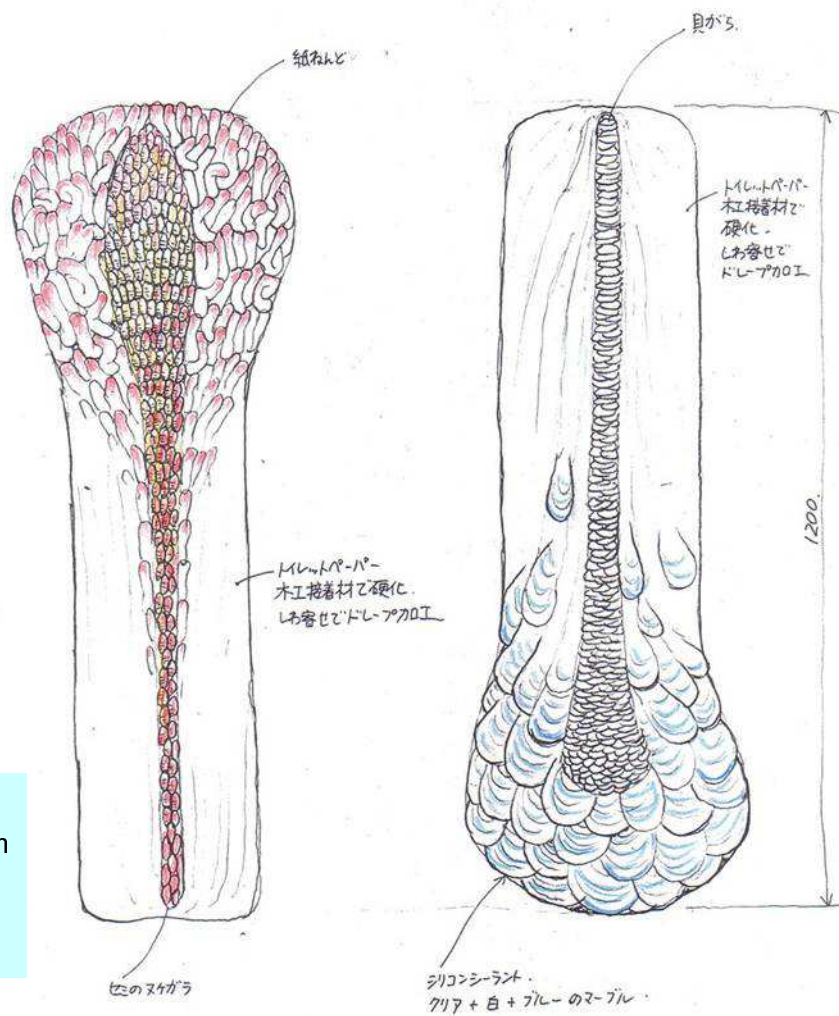
5-2. B壁面のタイトル: 「浮いたり沈んだり」



B1:

サイズ: 縦1200×横350×厚さ100mm

「私たちは上昇する。
まぐわいたいから。」



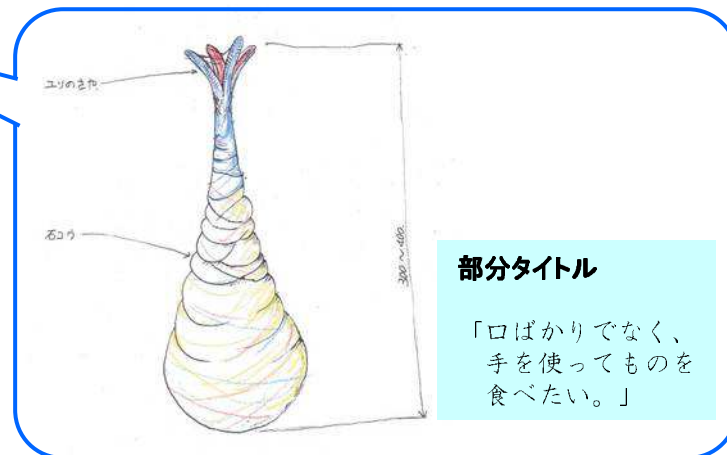
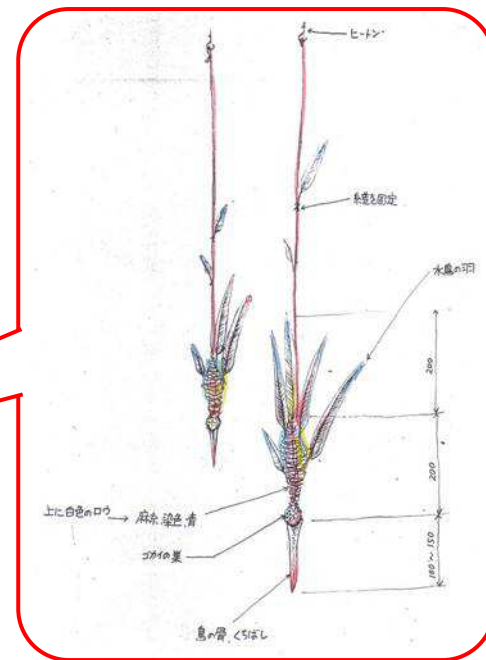
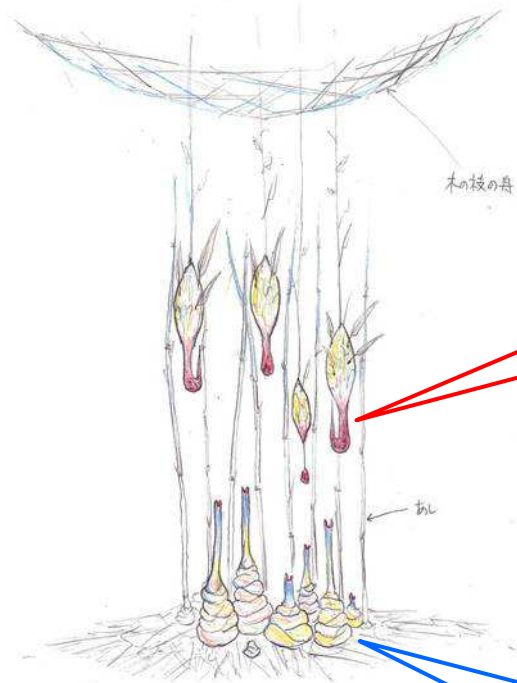
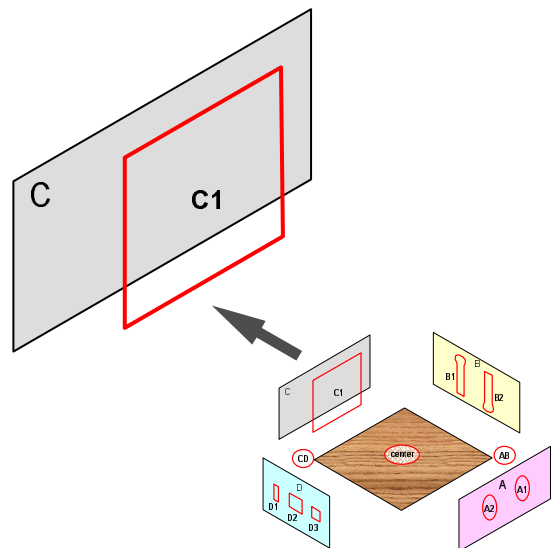
B2:

サイズ: 縦1200×横350×厚さ100mm

「殻を重ねて私を隠す。
その肉は既に硬さを失う。」



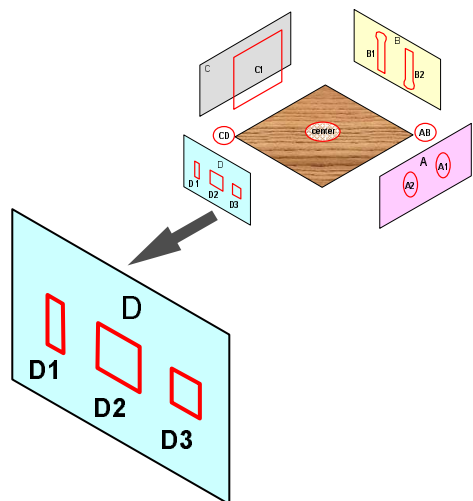
5-3. C壁面のタイトル: 「今昔」



C1:
 サイズ: 縦2×横2×厚さ0.5 m
 「既に水に落ちた私は、水の底より、
 落ちていく彼らを見ていた。
 私は、笑っているのか、泣いているのか。」

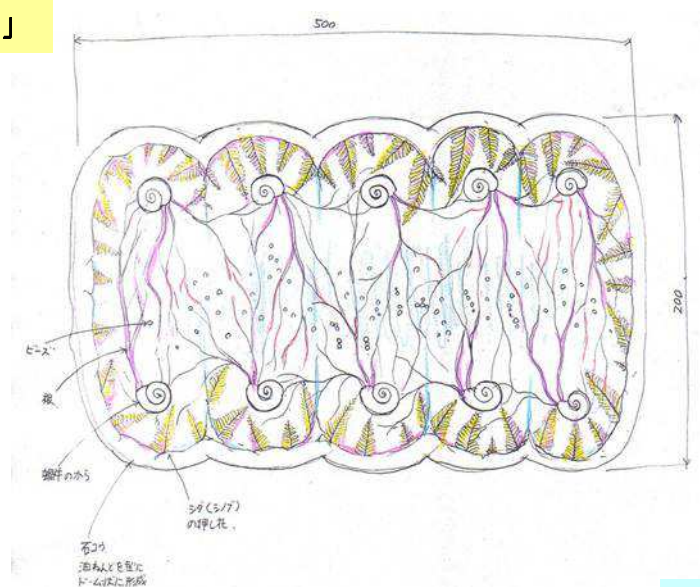
部分タイトル
 「口ばかりでなく、
 手を使ってものを
 食べたい。」

5-4. D壁面のタイトル: 「もしも愛があるならば」

**D1:**

サイズ: 縦300×横140×厚さ60mm

「わたしがあなたを食べるのならば、
あなたはわたしを食べて良い。
あなたがわたしを食べるのならば、
わたしはあなたを食べて良い。」

**D2:**

サイズ: 縦200×横500×厚さ60mm

「わたし達があなた達を食べるのならば、
あなた達はわたし達を食べて良い。
あなた達がわたし達を食べるのならば、
わたし達はあなた達を食べて良い。
わたしの雫を受け取るならば、
あなたの雫を受け取るう。
あなたが卵を生む様に、
わたしも卵を産むでしょう。
長雨が降る。日が照り映える。
葉裏で、皆で、眠りましょう。
そのようにして、長いしとねのその内に、
子らの園は広がる。」

**D3:**

サイズ: 縦240×横210×厚さ100mm

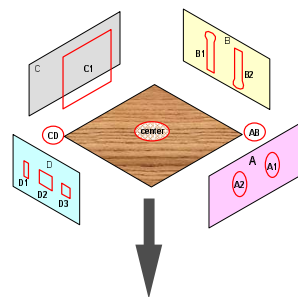
「肺と肋骨と大胸筋ごと
切り取られた祖母の右の乳房と
残りの肺より呵々と吐き出される
彼女の笑い声と
風呂場にて大声で吟じられる
彼女の詩について。」



Chabudai-Factory



5-5. ギャラリー床面のタイトル：特になし。

**CD:**

極小のおたまじゃくしの群れの絵。

サイズ：縦100×横200×厚さ3 mm

「すみっこで生きていくよ」

AB:

瓶詰めの死んだ蠅。

サイズ：縦50×直径35 mm

「すみっこで死んでいるよ」

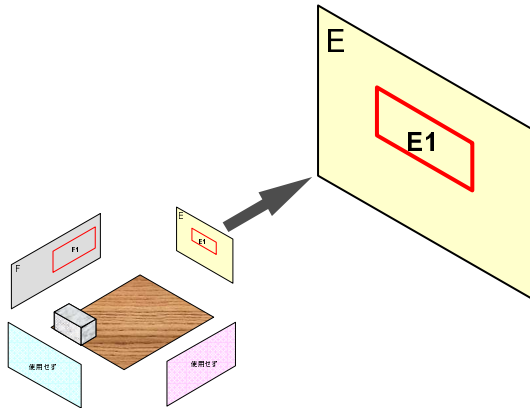
各壁面タイトル A、B、C、Dの表示



6. カフェルーム 各壁面展示の詳細

2013.05.26 和田聡文

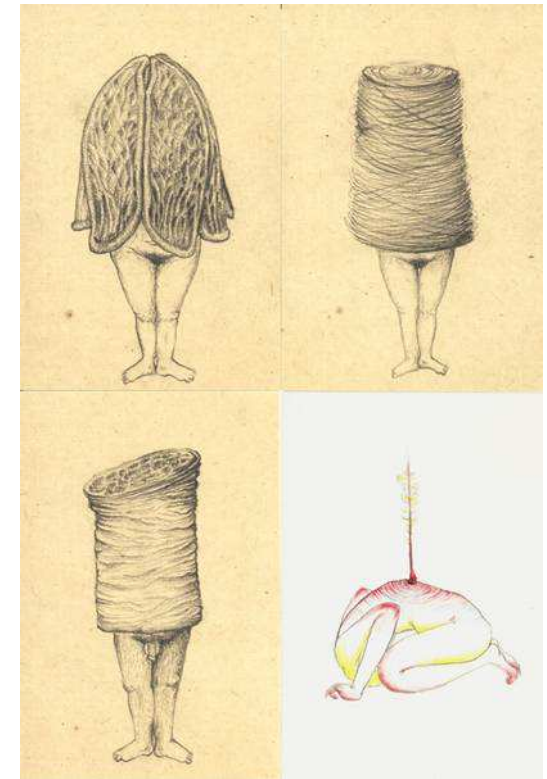
6-1. E壁面のタイトル: 特になし。



E1:
線画、筆ペン画、落書きの類

タイトル

「日々の歩行、日々の線
重力と反力、地平と足
ゼロモーメントポイントと安定余裕
手と目、紙と筆、軌跡と視覚」



「黄色い壁紙」
2012年2月22日(水)～3月4日(日)
小山冴子、工藤見奈子、田熊沙織 3氏

art space tetra であった上記展示にての会話への返歌。

「毎日何だか線を描いているんです。」(小山冴子さん?)
↑
「そりゃあ、歩くことと同じだろう。」と、思った。



Chabudai-Factory



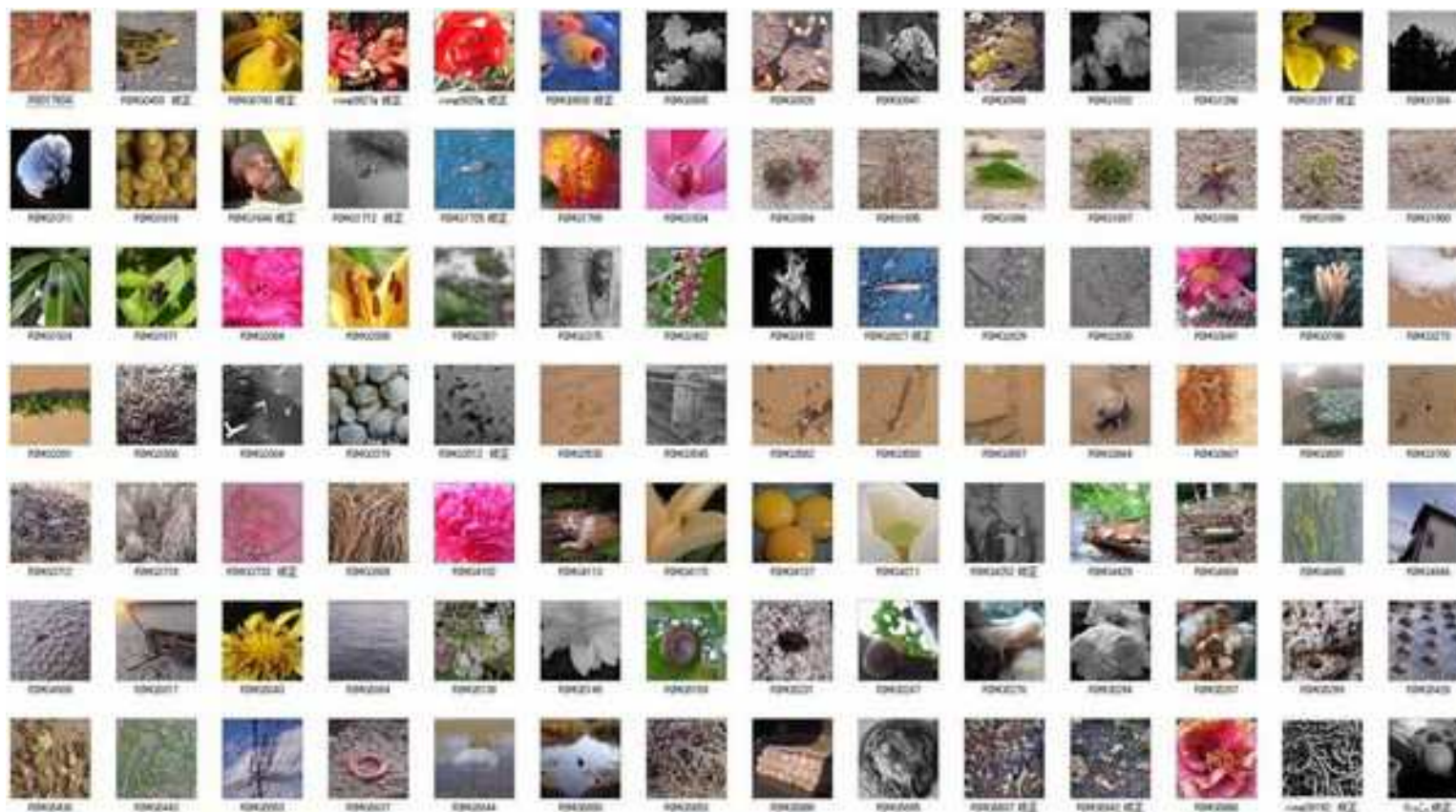
6-2. F壁面のタイトル：特になし。

F1:

サイズ：縦400×横400×厚さ10mmのパネル ×11枚(それぞれに写真9枚づつ)

99枚の組写真。各120×120mm程度の正方形。
作品としてではなく、散歩写真として撮られたが、何か嫌なものが写りこんでいるもの。
ギャラリー展示の内容の気分的断片。

「 写真の写真 幾ばくの嘘 」



Chabudai-Factory

